サポーターズクラブの取り組みについて

基幹センター　調整課長
精神保健福祉士　丹野　孝雄

１．はじめに

『サポーターズクラブ』は、みやぎ心のケアセンター（以下、当センター）から支援要望のある自治体や地域、機関等へ必要に応じサポータズクラブ登録者（以下、サポーター）を無償で派遣する事業である。サポーターは、精神保健福祉に関して様々なスキルを習得している専門職員（医師、保健師、看護師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、臨床心理士、保育士等）である。この事業は、関係機関に所属する精神保健福祉等の専門職員との連携のなかで取り組んだ。

２．平成26年度活動報告

（１）活動数

平成26年度は、実人数８名（延べ９名）のサポーターが自治体等や当センター主催事業で活動した。サポーターの活動状況は、８名のうち、２名が新規で他の６名は平成25年度にサポーターとして活動した経験があった。活動延べ日数は16日で、そのうちコンサルテーション、個別相談での活動は合わせて12日だった。

（２）活動内容

活動は、一日のみの単発的活動と一定期間継続的に行う活動があった（表１）。単発的活動は、当センター事業のデイキャンプ（被災地の親子を対象）、健康相談面接、研修会講師であった。継続的活動は、コンサルテーションと個別相談で、自治体の要望により専門職員を派遣した。

表１　サポーターの派遣先と活動内容（平成 26 年度）

支援内容	詳細	職名	派遣先
研修会講師	タッピングタッチ研修会 （対象：専門職、支援者）	精神保健福祉士	気仙沼市
個別相談	プレハブ仮設住宅住民対象 健康相談会の個別相談	作業療法士	山元町
コンサル テーション	保健師、家庭相談員に対する 専門的立場からの助言	臨床心理士	岩沼市
主催事業運営	デイキャンプの当日運営協力 （対象：被災地小学生と保護者）	医師 精神保健福祉士	当センター
健康調査後 面談	社会福祉協議会職員の 健康調査後面談	精神保健福祉士	当センター

（３）継続的な活動

ここではサポーターズクラブ登録者の安井由紀氏と鈴木真紀氏両氏の報告をもとに記載する。

安井は、岩沼市の母子相談のコンサルテーションに取り組み、臨床現場で奮闘する保健師や家庭相談員に対して、相談事例の介入方法やリスク度の検討、連携の確認等の助言を行った。被災住民の相談事例は少ないが、機能不全家族の中で育った子どもの問題に関する相談があった。活動に際しては、『作戦会議』的に相談支援に関わるひと同士の連携が図れること、支援者が諦めずに対象と関係をとり続けられるよう支えていくことへの意識を要した。

鈴木は、山元町のプレハブ仮設住宅の住民を対象とした健康相談会における個別相談に取り組み、住民の健康相談に応じるとともに、サポートセンタースタッフと健康相談会の準備や健康づくりに役立つ技能の提供を行った。健康チェックのために訪れる住民の健康度は、比較的保たれていると考えられた。体重と血圧の増加傾向は見られるものの、自身の健康への関心があり、医療機関の指導を受け症状をコントロールしている人が多かった。また住民が、『話ができる場所』として健康相談会を捉えていることも感じた。

３．今後の活動に向けて

活動初期においてのサポーターは、当センター職員とともに、数日間から数週間といった短期の支援活動に従事し、即戦力の協力者として当センターとともに後方支援的活動を行う役割を担ってきた。しかし、時間の経過とともに地域のニーズも変化し、より継続的な対応を求められるようになった。渡部[1)]は、東日本大震災後の当センターに寄せられるニーズの変化として、『…人手を優先する傾向が強かった１年目から、２年目になるとより長期の派遣が望まれるようになり、そのような状況の変化にも適切に対応する必要があった。』と、より継続的な支援が求められるようになったと述べている。

平成26年度の取り組みでは、継続的に地域の課題に対処できる専門職員の派遣要望があった。地域のニーズに応えることのできる経験と技術を持つ専門職員は、元々それほど多くはなく、また、不足する専門職を補うような仕組みも十分ではない。このような中で、サポーターズクラブのサポーター派遣は、自治体で不足しているいくつかの精神保健福祉ニーズに応えることができたと思われる。平成27年度においても引き続き継続的で定期的な専門職員の協力が求められていることからも、このことがうかがわれる。今後も当面のニーズに応えていくことが大事なのであろう。

震災後に改めて『人と人とのつながり』の大切さを感じた。特に、震災以前から培われていた関係やネットワークに助けられ、励まされた。平時における良好な関係性や取り組みが、災害時の特殊な状況においても有用だったことを実感した人も多いと思う。